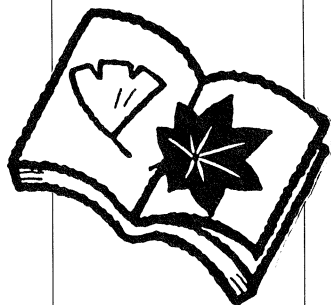


市の史の 広場

甲府に住んで ——雑感——

小 池 真奈美



私が初めて「甲府」という地名を知ったのは、北海道に住んでいた小学二年生の頃で、姉の文通相手が韭崎の人でぶどうの採れる甲府の近くだということを教えられた時でした。その頃の私にとってはとても遠い所すぎて、その甲府に住むことになろうとは思ってもよらないことでした。その後東北の郡山、東京へと移り、甲府については特別知る機会もなく過ごしていましたが、縁あって三年前に嫁いできました。そんな私にとっての甲府の印象を少しのべてみたいと思います。

甲府に降り立って初めて目にしたのは、整備された駅前から広々とした道がまっすぐ伸び、その道に沿ってたくさんビルが立ち並ぶ光景です。トンネルをいくつも抜けたあとに登場するであろうと想像していた街とはずいぶん違って、その大きさと都会的な様子に驚きを感じました。そんな光景とは対照的に、ぐるりと周囲を山々に囲まれ、四季ごとに変わりゆく自然の美しさを朝に夕にながめることのできる毎日。なんとと言っても日本一の富士山の姿は絶景であり、新幹線の中からは見たことのなかつ

たその姿が我が家の窓から見ることができ甲府は、私にとっても魅力的な所です。景色のすばらしさは昼間だけではありません。甲府の夜景の美しさも必見のものです。山々に守られた美しい宝石という感じで、貴金属産業の街甲府にふさわしいものだと思います。

その山々にこだまするように、甲府では一年中時期を問わず頻繁に花火が上がりまふ。どうもお祭りの日ばかりに限らずといったようですから、甲府の人達は賑やかで、ぱっと派手やかなことが好きなのでしょう。か。「えびす講・節分・七夕」といった商店街の売り出し等もとても盛んで、華やかに飾りつけられた街へ大勢の人々がくり出す様子に、この街の活気と、人々の生活力溢れるエネルギーを感じます。

新しい土地に行き、そこに早く馴染むには、できるだけ早くその土地の方言をマスターすることです。甲府の方言については何の知識もなく、東京に近いところなのだからほとんど標準語なのだろうと考えていた私にとって、初めて聞く甲府の言葉はとても新鮮でした。東北弁のような方言の代表的なものとのちがいが、甲州弁は全国的には

あまり知られていないのではないのでしょうか。一昨年の「武田信玄」の放送を見て知った人も多いことと思います。私はまず特徴のある言葉やアクセントを見つけて真似してみることから始めました。「やせたい、やぶせたい、しゃらうるさい、だっちもない、おまんら、わけーし……」等々、威勢のいい言葉が次々と耳に入ってきます。

語気の強さと歯切れのよさ、そして独特のアクセントとまくしたるようなテンポが合わさって、けんか腰のようにさえ思え、こんなことを言うとしかられるかもしれない、初めの頃は、甲府の人はとてもきつくてけんか早く、私のような「わたりもん」にとってはつきあいにくい人達ではないかなという心配をしたものです。でもそれぞれの言葉の使い方やニュアンスがわかってきて、実際に自分でも使ってみると、甲州弁はとても味わいのある言葉であることに気がつきます。そしておつきあいをしてみると、甲府の人達は、親切でめんどろみの良いあたたかい人が多いように思われます。

近頃では私も、「いいじゃん・いいさよ」といったような言葉が無意識のうちに出る

ようになってきました。そんな時、私も少しは甲府の人になってきたかなとうれしい思いがします。あと何年かたってふと気づくとすっかり甲州弁になっているかもしれません。そんな日が来るのをとても楽しみにしています。

山梨の民話にあらわれる動物

宮 澤 富美恵

とりとめのないことを書いてしまいました。が、私はこの街に住めるようになったことに喜びを感じています。これからも甲府の自然や言葉、そして人々との交流を大切にしたいと思っています。

(市史編さん事務局)

狩猟採集経済の時代には人間にとって動物は重大な関心の対象であり、日常生活の中で話題にのぼることも多かったかもしれない。現代に至るまでの長い時間、動物と人間は様々な関係を結んできた。民話(昔話)の中にはその関わりの一端を示すものが多く含まれている。山梨に伝わる民話の中には、山国とあつてか動物の登場するものも多いという。

ここでは、一九二二年から一九八〇年の間に直接採集、公表された昔話資料を収載した『日本昔話通観』第一二巻「山梨・長野」(稲田浩二・小沢俊夫編、内容は「む

かし語り」「笑い話」「動物昔話」の三つに分けられている)から、「動物昔話」に特にこだわらずに、登場する動物達の個性(といってもそれは語り手＝人間の動物観が強く反映したものだが)をいくつかみてみたい。

狼(山犬)

牧畜民にとっては凶悪な獣の代表である狼も、日本では恐怖の対象であると同時に害獣から田畑を護る(ヘカミ)、 「大口真神」として祀られ、関東・中部を中心に広がる三峯講では狼が眷属として現在でも信仰の対象になっている。秋山村に伝わる「古屋